



ガーナ現地研修で印象に残った2枚の写真集 1/4

● 天野 勝



「教師である幸福」

多くのことを学んだガーナでの13日間。学んだことを伝えるのが私たちの使命であるが、伝える相手が大勢いること、そしてその対象が未来を担う子どもたちであること。その幸せを感じずにはいられない。



「自分の身は自分で守る」

誰に言われずとも、1日の始まりは体へ防虫薬を塗ることから。そして携帯用蚊取り器を携え、ミネラルウォーターを持っていざ出陣。食事の時は生ものに気をつけ、集団行動を厳守し、夜は蚊取り器のスイッチを入れて就寝。野口英世の苦勞を少しでも味わえた13日間だった。

● 安藤 薫



「満面の笑みで手を振る子どもたち」

学校訪問後、村を歩いていると「あんどぅ〜！」と私を呼ぶ声。声の主は人懐っこいガーナの子どもたちでした。日本の子どもガーナの子どもそういう所は一緒だなと思いました。



「ケーブコースト城のガイドさん」

ここで奴隷貿易が行われていたという事実。暗く湿った地下牢。どれだけの人の怒りや悲しみ、絶望が染み込んでいるかと思うと胸が詰まる時間でした。

● 伊藤 佳貴



「ガーナ白熱教室！」

「授業後は何をやるの？」という問いかけに、家の掃除や弟たちの世話、路上での物売りなど、どの子どもも家族の手伝いをするとのこと。しかも、答える顔には満面の笑みが……。熱く、そして深く考えさせられる授業でした。



「DOOR OF NO RETURN」

奴隷貿易の拠点となったケーブコースト城。この扉を通して幾千万のアフリカ人が「黒い積荷」として送り出されました。このような非人道的な扉が二度と開かれることの無いよう、願いを込めての1枚です。



ガーナ現地研修で印象に残った2枚の写真集 2/4

● 岩花 亜紀



「あのね、僕は…」

ドンボアセの学校の子どもたちにインタビューをした時の写真です。私の耳元で丁寧に答えてくれた子がいました。将来の夢を聞いたときには、たくさんの子が手を挙げて、就きたい職業を教えてくださいました。



「ガーナの先生や子どもたちのために」地域の教育委員会に派遣されている青年海外協力隊の吉田華奈さん。後ろの用紙には、手作りの教材の提案が紙いっぱい書いてありました。ガーナの生徒・先生たちのために力を注ぐ彼女は、人柄もとにかく魅力的な女性であり、教師の鏡でありました。

● 河田 康浩



「ケープコースト城内の祭壇」

奴隷貿易の「集積所」として利用されたケープコースト城内で亡くなった人々の祭壇と、一方的な被害者ではない自国の負の歴史を我々に静かな語り口で過去の過ちを淡々と語るガイド。



「里帰り」

日本のガーナチョコレートがガーナのカカオ農園に里帰りしました。

● 河村 有紀



「名ドライバー アニムさん」

一番お世話になったガーナ人。機転の利いたアドバイスをしながら、朝から晩までガーナ中を案内してくれたアニムさん。力持ちで、寡黙で、誠実で、優しいイケメン。貧しい幼少時代を経て、今や都会で家を持つまでに！



「何百回、水くみをしてきたことか…」

現地でホームステイをしながら教育支援を行っている吉田華奈さん。現地の方に寄り添い、同じ食事とライフスタイルをする中で培われた信頼関係に感動。孤独や不安、教育環境への憤りとも一人で戦ってきたでしょう。



● 戸塚 康博



「ケープコーストの足跡」
この海岸から多くの方が、アメリカ大陸に連れて行かれた。どんな思いでこの海岸を歩いたのだろう。奴隷貿易の拠点ケープコースト城近くの海岸に、誰かの足跡があった。



「俺とやる気か？空手のポーズをとるガーナの子ども」
学校訪問で、空手を披露した。その2日後、別件で転んで怪我をした子に、チームみんなで折り鶴を作り少年の家に届けに行った。近所の子が寄ってきて、空手のポーズを見せた。俺を覚えていたんだな。

● 永田 和久



「大合唱！&アフリカダンス！！」
120人を超える子どもたちが、学校へ訪れた自分たちに大合唱を聞かせてくれた。すさまじい熱気とボリュームでテンションが上がりがっばしだった。最後に、アフリカダンスも加わり最高なひと時であった。



「とある村の小さな子どもたち」
自分たちはアフリカ ガーナでたくさんのことを学び、刺激を受けた。この村の子どもたちは、僕たちを見て何を感じたのだろう。大きくなったらどんなことを思うのだろう。

● 服部 秀子



「ガーナでの最後の集合写真」
ガーナでの最終日。最後の任務であった報告会を終え、JICA 事務所前にて撮影。肩の荷が下りた様子で、みんな満面の笑顔。全員が無事に研修を終えるというミッションを達成した一枚。



「ガーナの空」
研修時期は雨季。10日間の滞在中、青空を見ることができたのは数回。雲の切れ間から現れたガーナの青空は一段と綺麗に見えた。でも当たり前だが、日本の空と何も変わらない。どんなに遠くても、同じ空の下だった。



● 平林 悠基



「談笑する教師」

今回の海外研修では移動から食事、見学からワークショップまで常に行動をともにしてきました。その中で普段はなかなか話せない教育について、それぞれの思いなどを話し合うことができました。1人で考える時間も多くとっても意義のある時間になりました。

「負の遺産ケーブコスト城」

今回の研修の中で教育以外で特に考えさせられたのがケーブコスト城でした。実際に奴隷だった方が入れられていた部屋に入ると様々な思いが出て、想像を越える世界がありました。



集合写真

⊞：農家訪問、フーフー作り体験後
(農民や青年海外協力隊と一緒に)

⊟：青年海外協力隊(小学校教諭)活動
(ガーナの子どもたちや先生と一緒に)

